書評

『戦争のなかで考えたこと ―ある家族の物語』

日高六郎 著

（筑摩書房）

小口 広太

この本は著者が少年時代を過ごした中国・青島での生活、父や兄、家族の歴史をつづった物語である。

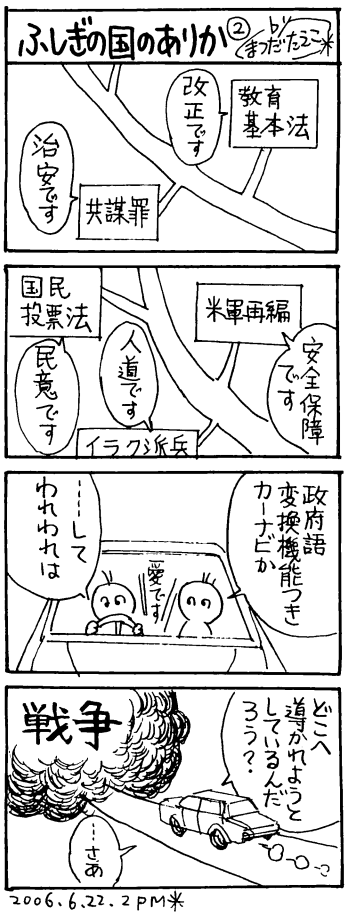
著者は満州事変の始まる数年前の2度にわたる日本軍の山東出兵があったことから戦争嫌いになり、また、東京の大学に通う兄、天皇を崇拝する保守主義者である父も満州事変に反対で、日本軍の行動について懐疑的であった。弟は小学5年生のとき（一九三一年）に『暁』という家庭向けの新聞を発行し、著者も父も兄も弟も茶の間で戦争について議論し、『暁』に反戦的な短歌や詩、文章を寄せていた。

私事であるが、先日、靖国神社に行き感じたことがある。「英霊として祀られている人たちは、本当にそれを望み、日本軍が戦争を遂行することを望んでいたのか」と。「当時、著者のような家族は多く存在したのではないか」、「靖国神社に祀られている戦死した兵士、その家族の感情は国家の考えと全てにおいて一致していたのだろうか」と、この本を読んで改めてそう感じた。

一九四四年の夏に著者の兄の死が家族に知らされ、父は息子の死を全くの私事として扱った。それは家族だけの事件であり、悲しみであり、そのとき家族は「公的に口外できない怒り」を感じた。

「私は、兄を『愛国兵士』とも、あるいは『反戦兵士』とも呼んでほしくないと思う。一人の兵士が雲南省の奥地で死んだ。それだけが私たちが知ることのできた真実である。それを強いて、愛国兵士としてどこかに〈祀る〉という。未知のことがらを真実であるかのように第三者が決めて、死者を『飾る』。それは兄をたたえているのではない。死者を利用しているだけである。ほんとうに死者を尊敬するのならば、ウソを言うな。知らないことを語るな。本人にも家族にも了解をとらないで、死者を〈英霊〉と名づけることはゆるされない。」と著者は言う。

著者の家族は、思想的にも一人一人違い、戦争反対の理由も各人各様であった。しかし、父が「平和は万人が望んでいる以上、さまざまなことで思想信条の違う人も、協力すれば、戦争を阻止できるはずだ」という意見を持っていたように、「平和が大切である」という点で、家族の意見は一致していた。

著者はあとがきで、自己反省をしない非現実的な歴史認識、憲法、教育基本法の改正という動きの中で、日本が「戦争をしない国」から再び「戦争ができる国」「戦争をする国」になろうとしている「今の日本のなかに流れている空気が、満州事変の前と似ている」と懸念している。そのような時代だからこそ、著者の家族が持っていたような多様を尊重しながら、「平和」に向かって連帯するという考えを持ち、それを実践したい。

（こぐち・こうた、明治学院大学大学院 BOOMERANG NET）